

膳次第、同内裏儀、略中理髮向御膳宿、略中藏人平口取御盤、居土器參上陪膳取御三把、一口盛御飯

藏人持參臺盤所、女房取之持參御帳内、令供阿末加豆子細見九條殿記、彼時女房勤仕、此役、然而有

院宣被付男房也、次藏人參兼取殿上下盤參入如例、本阿末加豆御土器、又被盛御三把、如例、被出御膳宿、方可供此之餘料、

〔源平盛衰記 四十五〕内大臣京上被斬附重衡向南都被切并大地震事

本三位中將重衡卿ハ、略中東ノ旅ニ下リ上リ、風ニ窄レ日ニ黒ミテ、アラヌ貌ニシテ衰へ給タレ

共、道ニ餘フ人ニハ替テゾ見エ給ケル、暫有ケレバ御食賂出シテ進セタリ、是ヤ此下臆ノ云ナル

死シカケ糧トハ只今死スル者ノ魚鳥不可有トテ、取除サス、散飯多カニ取テ、佛前ニ備テ、其後ハマヒラ

ズ、略下

〔玉藥〕承元三年三月廿三日、此日故攝政前太政大臣良經長女有入宮事、名立子余道藤原參書御座、

略註次供、略中皆供了姬君立著七、先七、次取最把入飯於羹鮑食之、略下

承久二年四月十六日、此日東宮恭仲始聞食魚味、略中次大夫弘長押下持笏紐、進寄御座邊懷笏、

先以木御箸取御三把盛阿末加津土器、自今無供御三把於呵梨底、御箸供燒鯛、一次供雉、一著院

御方重可渡御之由被申之、略中次供朝餉御膳、儲君御坐御疊上、陪膳別當三位、略註取御三把供呵

梨底、自今日如此二度於此御所供之、今一度於内裏可供之、略下

〔年中恒例記 正月〕年中御さばの供御昔は毎日參、四膳參也、御生飯をとられて則あがり申也、大草

調進之、大草か、へ申御祝御料所數多在之し時は、如此毎日參也、近年は若州青江ばかり知行の

間、毎月朔日より外不參しなり、大草入道の説也、只今は節朔は御誕生日計參也、

〔宗五大草紙 上〕人の相伴する事

一點心の時參様、略中又作善の時は、僧達はさばの心にて、ちとちぎりて、右のさらに取置候、いづ

れも點心同然に候、